

第3回 国際森林年国内委員会 議事概要

日時：平成23年8月3日（水）15:00～16:30

場所：C.W.ニコル・アフアの森財団アフアセンター

出席者：（国内委員）佐々木座長、天野委員、出井委員、井上委員、草野委員、ニコル委員、多田委員、仁坂委員、沼田委員、宝月委員、宮林委員、養老委員

（特別ゲスト）

阿部長野県知事、松木信濃町長

（事務局：林野庁）

皆川長官、末松林政部長、古久保森林整備部長、上田海外林業協力室長 外

議事概要：

【委員会に先立ち、阿部長野県知事及び松木信濃町長より挨拶】

（佐々木座長）それでは議題1「国際森林年の取組状況について」と併せて議題2「国民に向けたメッセージ・宣言の発出について」林野庁長官から説明をお願いします。

【林野庁長官より資料に基づいて説明】

（佐々木座長）まず、議題1について意見があれば伺いたい。ないようであれば、議題2について議論したい。敢えて分ければ、メッセージのあり方やスケジュールの話と、考え方や中身の話に大別できると思う。こうした論点を念頭にご発言いただくとありがたい。

それでは、資料を提出されている宝月委員と養老委員から発言をお願いしたい。

（宝月委員）日本森林学会についてまずご紹介する。日本森林学会は我が国の森林関係で最も大きな団体であり、その他の森林関係の学会を取りまとめている傘団体でもある。日本森林学会としての国際森林年のアピールをお配りしているので議論の参考として頂きたい。学会としては10月に京都で病虫害に関するシンポジウムを予定しており、国際森林年関連行事として整理している。

国内委員会として発信するメッセージについて、森の恵みやバイオマスといった話が出ている。その他の観点として、日本の森林の半分が保安林となっており、それぞれに指定理由があることを述べたい。保安林で最も多いものは水源かん養保安林であり大半を占めている。その他、土砂流出防備保安林などが続いているが、森林の水土保持という機能は全体の中で重要であることを指摘したい。

（養老委員）委員会として提言書を出した。内容について天野委員に説明させたい。

(天野委員) お配りした資料は「日本に健全な森を作り直す委員会」で7月20日に提言書を作り、菅総理に手渡したものだ。平成21年9月18日に第1次提言を発表しているが、今回は「森林(もり)と自然のエネルギーに生かされて生きる日本になるために」というタイトルである。参考にして頂きたい。

国際森林年を利用して(当委員会として)宣言したいという考えはよいことと思う。そこで考えておくべきは、2日前の新聞で環境省の中に原発を監督する機関を設置するという動きである。昔の環境省は小さかったが今は「省」となり、更に役割が増えている。折角森林年を利用するのなら、もっと国民に訴えられるよう「林野省」にしようといった目標を掲げてはどうか。笑われるかも知れないが環境省をみれば夢ではない。頼りになるような役所に生まれ変わらなければならない。

資料の3ページについて意見がある。出井委員が以前発言された①企業が率先して国産材を使うようにという話と②グランドビジョンについてである。林野庁は独立採算制で良いときは良かったが、戦後は全国の森林が真っ裸になってしまい、その後は森を育てるばかりで使うことが出来なかった。本来は国民負担のはずだが、森林保全のための資金がなく2兆8千億円に借金が膨らんでしまい、関係者からも「解体してしまえ」「環境省に統合せよ」という議論があった。もし本当に環境省に統合していればもっと小さな予算になっていたと思う。大きい予算をもった生まれ変わった林野庁をみたい。

今日は井上委員もお越しになっている。セイホクは日本の合板の1/3を担い、社員8名で森づくりのグループを立ち上げている。自前の取り組みで林業を変えていこうとしている。自分は「道の学校」を作ろうと考えており、その面で井上委員の取り組みに協力していきたい。

長官に提案したアファンの森と国有林の協力の第一歩が明日実現する。中部森林管理局長と一緒に森に入ることになっている。隣の国有林材は未だ小さいがニコルさんのアファンの森の木は大きい。ニコルさんの友達で馬に作業させようというグループがある。ホースロギングの文化は岩手県に実際にある。70歳前後の方から若い方で33歳という方までいる。今ならまだ東北の文化が継承できる。

(出井委員) もう一度考え方を述べる。3・11以前と以後では考え方を変えないといけない。自分は震災後の日本を海と船に例えている。海は民間で荒れている、船は政府でどこに行くのか分からない状況。これをどう持って行くのか、短期的な目標をどう置いて、ビジョンをどうするのか。アメリカと中国に挟まれて日本はアイデンティティクライシスに陥っている。輸出比率を見るとサービス業が70%、製造業が15%。15%しかないモノづくりの輸出で復興していくというビジョンには無理がある。3・11後の基本的考え方を整理するのが我々の責務である。

復興は東北だけでなく日本全体の問題である。韓国や台湾が脅威となり始めている。一次産業はほとんど衰退しており、里山と都会の間にある農村では過疎化が進んでい

る。農村と都会の共生が必要であり、自分は手弁当で日中間のプロジェクトをしている。欧州は森と都会とが一体化している。東京一極集中の中で里・村をどう生きていくのか。自分は古くから訪れているが、軽井沢の東京化を懸念している。

1ドル77円で輸出産業はあり得ない。具体的な技術を拾って何をするのか「復興に関する10の提案」などをまとめるべき。都会と農村の共生や瓦礫の処理技術とか。また日本にはすばらしい水がある。これらの全体の枠組みの中で森づくりをどうするのか考える必要がある。

(宮林委員) 大きな視点から言えば出井委員のとおりだと思う。3・11以降は大きく転換すべきだ。一方、そのような中で国民には農・林・水が理解されていない問題がある。(提言の) 前文で木材や森林の良さや意義をしっかりと書く必要がある。ルバング島の小野田さんは森があるから生存できた。それだけ森は重要。また、小さくても地域で頑張っている人、匠というか、きちんとやっている人がいる。このような人々を評価して、皆で目標にしていくという考え方が必要。また、宝月委員から森の恵みについて言及があったが、水は入れなければならない。水の位置づけが総体の中ではっきりでてくるのが森林である。流域社会の中で森林の枠組みを変えていくことが必要。地域でキチンとしたものをキチンととりあげていくことが必要。

(草野委員) 宮林委員と重なる意見を持っている。先ほど提示された資料の「考え方」というところは行政や専門家の方々なら分かるが、一般の方々にはわかりにくい。一般国民は意識があまりにも森から離れていることが問題。何が問題で何が危機なのか、どうあるべきかを前段できちんと分かりやすい言葉で訴えた方がよい。

地域に独特のコミュニティがある。営利ではなく地域を維持してきた人々の取組を盛り込むべき。

(仁坂委員) 私の考えは以前ペーパーで提出したとおりだが、先ほど森を歩いて遊ばせてもらったら、さらに加えて言いたくなった。言葉で語ることは簡単で、心の底から思わなくても語ることはできる。心の底からそう思うためには好きでないといけない。知っていないといけない。子ども達に対して、自然や森や日本を知らなければ高校に入れてやらないというのはどうか。和歌山県は木の国であるのに、スギとヒノキの違いが分かる職員は半分位しかいない。言葉では空疎になる。皆で知り、味わうのが第一歩である。

(沼田委員) 森林セラピーとか環境教育について知ってはいたが、先ほどウッドチップの森を実際に歩いてこれが分かった気がする。森林での子どもの教育についてニコルさんが4分間の映像を上映された。この映像を作られた菅さんはよく知っている。映像でみると彼らの生き生きとしたところがよく分かる。

森は分け隔てなく皆を包んでくれることが写真で分かる。盲人の方々による写真コ

ンテストの審査員をしているが、こちらにも盲人の方々が訪れているそうだ。今後、弱者に優しい森が増えてくることを願う。

（多田委員）幅広い意見がでて、とりまとめが大変と思う。経済林的な立場から、ニコル委員には頭が下がる。自分は学生の頃、夏休みに家に帰ると10日間下刈の作業をさせられた。カマは切れずに息が切れる大変な思いをした体験がある。仁坂委員の言われるように若い人に教えるのは難しい。好きな人でないについてこれない。抽象的であるがこの好きな人をどうするのが問題である。岩手県では県立高校に学校林があり、生徒が毎年下刈りをするが、だんだんこの作業が嫌われてきている。住田町では若くして林業に携わっている方が多い。こういう人を育てていかなければならない。

3・11を機会に資源の利用が課題になっている。日本で最も豊かな資源は森と水である。震災を弾みに、木質バイオマスの利用を具体的に進めてほしい。ただ、林野庁の提案で心配していることがある。被災地の瓦礫中の木質バイオマスの利用ということだが止めた方がよい。住田町でも沿岸被災地からの瓦礫を処理しているが放射能の問題がある。放射能の問題がある木材を建築資材に使えるかどうするか心配している。住田町は福島から200kmも離れているのだがこの問題がある。

（井上委員）自分の会社は木を原料にしている。合板だけではなく様々な木材製品があるが、木をとことん利用していくことが森の恵みへの感謝の現れだ。現在、合板供給の60%は輸入材で、このうち90%はインドネシアやマレーシアなど東南アジア熱帯林からの製品輸入になっている。国内産のうち半分はセイホクが供給しているが、合板会社のうち数社が東日本大震災で被災した。生産側で国産材利用により自給率に寄与しても、最終のユーザーは60%以上が海外製品を使用している。

世界にはブラジルとかボルネオ等のように守らなければならない森林がある一方、日本は伐るべき森林を伐らない不作為の森林であり、放置され死んでいってしまう森林がある。世界の中で豊富な森林のある日本が国内で木を伐らず、守らなければいけない世界の森林を使っている。この世界的なミスマッチを国民の一人一人まで伝えていくことが重要。日本合板工業連合会の会長として全国植樹祭と全国育樹祭に毎回参加している。本年の和歌山県のことではないが、以前は植樹祭会場の床に南洋材合板が使われていたこともあった。関係者一人一人が意識として国産材を使わなければならない。森林を伐って使うことの重要性を強調したい。

（ニコル委員）自分の心は決まった。日本を救うのは健全な林業しかない。これまで自分に何が出来るか考えてきた。稼いだカネは森に注ぎ込んできた。でもハッピーだ。呆れていることは「カネにならない」と言い訳ばかり言う人たち。カネだけが目的ではないでしょう。

林野庁という愛しい天敵と本当に森を作るため、具体的な方法がある。このセンタ

一を国産材で建てたが、本当は長野県産材だけでも出来たはず。丸太はほとんど価値がないが、どうにか板にすれば価値が出てくる。移動式製材の道具を探したらニュージーランドにあった。いい道具がフィンランドにもイギリスにもある。どうして日本にできないか。愛しい天敵と握手して一緒にやろう。Let's become forest nation. This is what we should be.

（佐々木座長）自分の意見については皆さんに発言して頂いたと思う。

宣言文については、林野庁長官が提案した構成に本日の意見を入れて作業してみないとどんなものになるか分からない。抽象的な意見、具体的な意見、広く多くの方に理解されるための意見など色々いただいたので、色々工夫しなければならない。今後、頂いた意見を踏まえて事務局で案を作成し、皆さんにご照会したい。最終的には座長におまかせ頂きたいが、それまでの間は事務局と十分な意見交換をしてほしい。また国際森林年記念会議などの場で国民にも示して意見を聞いていく。最終回の国内委員会ではこれらの意見を踏まえて詰めの議論をしたい。

（天野委員）基本的にはOKだが、こうした宣言文を作るときにワーキンググループを作ってやる気がある人が作業するというやり方がある。それが私だけであってもいい。

資料4ページの考え方について、川上、川下というのがまさに国民にとって分からない言葉である。

（佐々木座長）ご提案は検討させてください。基本的な進め方は委員の皆さんに了承いただいたこととしたい。これで委員会を終了する。